



コロンボ外郭環状道路の開通式でテープカットを行うキリエラ道路大臣と菅沼駐スリランカ大使

まず向かった先は、1980年代から日本が円借款によって開発事業を支援してきた「コロンボ港」。コンテナの取扱量は世界33位（2013年）、南アジアでは1位の実績を誇る。

「スリランカはインド洋の中心に位置していて、物流に関しては絶好の立地にあります」。こう語るのは、同国で約20年間にわたり港の開発に携わってきた五洋建設

幅広い分野で協力関係を強化させていくことを表明した。

なぜ今、スリランカに注目が集まっているのか。その成長のポテンシャルを現地で探ることにした。

国の成長をけん引する 玄関口

株式会社の今坂清さん。事業が始めた当時はまだ内戦状態であり、厳重な警戒の中で業務にあたり、大型のコンテナ船でも対応できるように水深が15メートルと深く建設されているため、こうした深水港が無いインドからの貨物をコロンボ港で巨大船に積み替え、別の国に運ぶための拠点機能も果たしている。

コロンボ港の開発に積極的な姿勢を示しているのは日本だけではない。コンテナ船の大型化が進む中、水深18メートルのターミナルが港の南側に新たに完成。これに投資したのは、近年、途上国開発における存在感を急速に増している中国の企業だ。中国は、スリランカ南部に位置するハンバントータ港の開発支援や、コロンボ沖合の埋め立て地に高級ホテルやシヨ

の緩和が期待されている。南部のゴール市からコロンボ市郊外まで通勤しているという女性は、「職場の近くまで高速道路で行けるようになったので、朝の渋滞に巻き込まれなくて済む」と喜んでいて。2009年、30年近く続いた内戦が終結したスリランカ。以降、治安の回復に伴う観光業などの発展によって、2013年までの5年間の平均GDP成長率は6.7%と堅調な成長を続け、発展を支えるための道路網や電力網の整備といった経済基盤を強化する取り組みが、急ピッチで進められている。こうした中、さまざまな国が、スリランカの投資環境やビジネス展開の可能性に目を付け始めている。日本も例外ではなく、昨年9月には、安倍総理が日本の総理大臣として24年ぶりに同国を訪問。

南部の高速道路には、天候や渋滞などの情報を知らせる高度道路情報システム(ITS)も、日本の支援によって導入された



from Sri Lanka

スリランカ

世界のハブを目指して

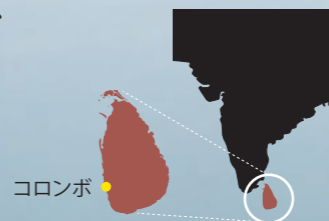
中進国入りを目指して発展を続けるスリランカ。北海道の約8割の面積という小さな島国ながら、インド洋の中心に位置する地の利を生かし、物流ハブとしての存在感を高めている。日本企業からも注目を集めるスリランカの成長力に迫った。

**加速する
ビジネス環境の整備**

澄み切った青空の下、民族衣装を着た踊り手たちが、太鼓の音に合わせて軽快なステップを踏む。9月17日、スリランカのコロンボ市郊外に完成した高速道路「コロンボ外郭環状道路」の新区間の開通式が、華々しく始まった。この道路の整備には日本が支援を続けてきた経緯から、式典では、現地のラクシユマン・キリエラ道路大臣と、菅沼健一駐スリランカ大使がテープカットを行った。その後、関係者による走り初めが行われ、沿道からは多くの市民がその様子を見守った。

今回の開通によって、コロンボ市中心部を経由せずに移動が可能になるため、首都圏での交通渋滞

の緩和が期待されている。南部のゴール市からコロンボ市郊外まで通勤しているという女性は、「職場の近くまで高速道路で行けるようになったので、朝の渋滞に巻き込まれなくて済む」と喜んでいて。2009年、30年近く続いた内戦が終結したスリランカ。以降、治安の回復に伴う観光業などの発展によって、2013年までの5年間の平均GDP成長率は6.7%と堅調な成長を続け、発展を支えるための道路網や電力網の整備といった経済基盤を強化する取り組みが、急ピッチで進められている。こうした中、さまざまな国が、スリランカの投資環境やビジネス展開の可能性に目を付け始めている。日本も例外ではなく、昨年9月には、安倍総理が日本の総理大臣として24年ぶりに同国を訪問。



コロンボ

世界のコンテナ船の半分が通過するというインド洋の中心に位置するコロンボ港。コンテナ取扱量は年々増加傾向にある



(上)コロンボ市内にあるエクスポランカの倉庫。空調が完備されているほか、ハトの侵入を防止する対策も施されている
(下)新たな旅客ターミナルの建設予定地。昨年、安倍総理がスリランカに訪問した際に除幕した石碑が建っている

カで最も大規模な空港が、世界主要47都市に就航する「バンダラナイケ国際空港」で、日本は円借款を通じて整備事業を支援してきた。今、その拡張計画にあたり一人の日本人男性が頭を悩ませている。プロジェクトマネージャーを務める、株式会社日本空港コンサルタツの西尾桂也さんだ。

現行の旅客ターミナルは、内戦終結後の観光客の増加などにより取扱容量（年間600万人）を超えたため、これから新たなターミナルや駐機場の建設が始まる予定だが、そのデザインをめぐり計画

が難航しているという。当初、ビルの屋根は、前大統領の意向でハスの花をイメージしたデザインが計画されていたが、今年1月の政権交代によって計画が見直され、デザインが変更されたのだ。さらに、ビル内部に関しても、飾り天井を取り入れるなどのデザイン変更の話が持ち上がっている。「空港事業は関係機関や団体が多いので、調整に一苦労しています」と西尾さんは話す。

これまでさまざまな国で空港整備に携わってきた西尾さんは、その経験を生かして、その空港に

何が求められているのかを意識しながら仕事をしている。現行のターミナルは、2001年にテロ組織に襲撃された事件を契機として、セキュリティ面を大幅に強化したという。スリランカ空港公社のアナンダ・ウィマラッセーナ会長（取材当時）は、こうした日本の協力に対して感謝していると語り、「日本と連携して、2020年までに1500万人規模に対応できる空港を目指したい」と意気込んでいる。

今回の取材を通じて、スリランカは国内のマーケット自体は小さいが、港と空港を発展させ、地の利を最大限に生かした事業を展開することで、まだまだ成長の可能性を秘めていることが感じられた。また、道路インフラの整備も進み、ビジネス環境も改善されつつある。こうした中、海外投資の促進を重点課題の一つに掲げる現地政府からの要請を受けて、土屋敬三JICA専門家、スリランカ投資庁(BOI)に投資促進アドバイザーとして派遣されている。元ジェトロ大阪本部長である土屋専門家は、BOI職員に対して、効果的な資料の作成やブレゼンの仕方などをOJT方式で教えている。実際にこれまで日本やシンガポールなどで、スリランカ進出に関心がある企業を対象にしたセミナーを開催したが、講演を行ったBOI職員のスキルは着実に向上しているという。「海外企業は何を求めているのか、どうすれば投資が増えるのかなどを戦略的に考えることができる人材育成が何より大切なので、自分自身のこれまでの経験やノウハウをできる限り伝えていきたい」と土屋専門家は語る。

内戦が終結し、平和を取り戻したスリランカ。南アジア、ひいては世界のハブとして成長を遂げるため、今、新たな段階へと踏み出している。



今年10月に東京で開催された「スリランカ・ビジネスセミナー」で講演を行う土屋専門家。スリランカでのビジネスに関心がある約150人が参加した

ツピングモールを建設する「ポートシティ」計画にも投資している。こうした中、今坂さんは「日本としても港のさらなる発展に向けて支援を続けていきたい」と語り、貨物の増加に対応するためのコロンボ港の拡張と、国内にある他の港の開発を今後の課題として捉えている。

「今後は橋やクレーンの製造など、重工業分野の事業も拡大させたい」と、竹原会長は意欲を見せる。

尾道造船のように、スリランカに進出している日系企業は約120社ある。その一つが、昨年、同国の物流大手「エクスポランカホールディングス」を買収したSGホールディングス株式会社だ。国内に5カ所ある倉庫のうち、港に程近い倉庫を見せてもらおうと、巨大な棚に保管された大量の洋服や水着がまず目に入ってきた。取扱品目の中で最も多いのがアパレル製品で、スリランカに加え、インドやバングラデシュで生産された製品を、欧米のアパレルメーカーに輸出している。



中国資本が入り建設計画が進む「ポートシティ」は、政権交代に伴う事業の見直しによって、現在は中断されている

さらに港内を進むと、インドの貨物船の外面を塗り替える大掛かりな作業が行われていた。1906年に大英帝国の船の修繕所として設立され、現在は世界各国の船の修繕や造船を請け負う「コロンボドックヤード」だ。その将来性をいち早く見いだしたのが、広島県の尾道造船株式会社。92年にコロンボドックヤードの株式を取得し、経営に乗り出したのだ。

この日も、トラックで運ばれてきた品物の山が、取引先ごとに分類され、次々と倉庫の棚に保管されていった。その間、二階では、商品に損傷がないか、メーカーによる厳しい品質チェックが行われていた。さらに、エクスポランカでは、海上と航空を組み合わせた最適な輸送ルートとタイムスケジュールを顧客に提供する「SeaAir Plus」というサービスが導入されていて、品質向上と効率化を図るための工夫がなされている。

物流事業部門のグループ会社「エクスポランカフレイト」のジャガット・パティロナCEOに話を伺うと、これまで他の国の同業者を視察したり、顧客の要求を聞いたりして、業務の質を向上させてきたという。今回、SGホールディングスとの連携によって、事業ネットワークが拡大するなどの相乗効果も生まれていて、パティロナCEOは「日本人スタッフは私たちが信頼してくれるとても良いパートナーです。カイゼンなどのノウハウを学べることもうれしく思っています」と話している。

世界にとって魅力ある投資先に

港と同じく、物流にとって重要な拠点となるのが空港。スリラン



スリランカ港湾公社のダッタ・グナセカラ技術責任者は、「日本との連携をより一層強化したい」と話している

貨物船の外面の塗り替え作業を行うコロンボドックヤードのスタッフ。現在、日本人エンジニア2人が現地に赴いて技術指導を行っている